

# 林業試験場成果発表課題 要約

## 1. 遺伝分析によるクマノザクラの雑種判定技術

(研究員 松久保康輔)

クマノザクラは新たな地域資源、観光資源として期待されている。しかし、雑種苗が普及すると、クマノザクラの生存が脅かされる恐れがある。雑種苗を除くためには若木段階での雑種の特徴を明らかにする必要がある。そこで遺伝分析による雑種個体の判定を行った。自生する5本のクマノザクラから採種した苗180本のうち8本が雑種個体と判定でき、簡便な雑種判定に寄与する知見を得られた。

## 2. 和歌山県下から収集したクマノザクラの開花・成長特性

(主査研究員 山下由美子)

クマノザクラの優良系統を選抜するため、優良と思われる候補木を収集・増殖し、同一地に植栽した後、開花状況を調査した。本県のクマノザクラには、開花時期が非常に早い個体、遅い個体、開花期間が長い個体、幼齢で着花数が多い個体があることが分かった。これらの情報は、特徴のあるクマノザクラの選抜に貢献するだけでなく、花色や開花時期といった多様な観賞ニーズに対応できることを示している。

## 3. 山土場等でヒノキ皮付き丸太に穿孔する害虫

(主任研究員 法眼利幸)

通年伐採の増加にともない、山土場等に集積された材に穿孔性害虫による被害が多発しているため、ヒノキ皮付き丸太に産卵する種と孔道の深さ等を調査した。6～10月に森林に1ヶ月置いた材にキイロホソナガクチキムシの幼虫が多くみられ、材の深いところまで穿孔していた。山土場では本種の産卵に注意する必要があると考えられた。

## 4. 県産スギ・ヒノキ原木の強度性能評価における簡易測定値の適合性

(研究員 栗田香名子)

簡易型強度測定器を用いた原木ヤング係数の測定を行い、①密度を一定としてメートル未満の材長を考慮せずに計算したヤング係数と、②実際の密度および材長を考慮して計算したヤング係数を比較したところ、簡易ヤング係数の方が安全側の低い数値となる傾向がみられた。この結果を活用することで、簡易な方法による原木の強度性能に応じた選別に寄与することが期待される

## 5. ヒサカキの新たな病害「枝葉枯れ症状」の防除技術について

(主任研究員 田中作治)

本県で有数の生産を誇る花木ヒサカキの新たな病害「枝葉枯れ症状」の、より効率的な防除方法として薬剤の散布期間延長と回数を削減した現地試験した結果、一部罹病枝葉から病害発生が見られた。また、これまでの試験研究結果を取りまとめた「枝葉枯れ症状」防除マニュアルを作成し、その中のヒサカキの手入れと薬剤散布による防除技術について報告する。